

## AB-ORIGINE: テスの巡礼

永 富 久 美

## I

トマス・ハーディの小説について考える際に、彼がウィルキー・コリンズの模倣から始めたという点は、意外に重要な鍵となるかもしれない。<sup>40</sup>『窮余の策』から『日陰者ジュード』にいたるまで、ハーディは一貫してセンセーショナルな描写への愛着を失わない。それは様々な資質が混じり合った作家ハーディの体内を、ひとときわ紅い光彩を放ちながら流れていく一筋の血脈のように、見逃すことのできない彼の性向の一部である。『ダーバヴィル家のテス』の結末近くで、テスがアレックを刺し殺す場面——殺人が行われた真下の部屋の天井の中央に血痕が滲み出し、「一枚の白い巨大なハートのエースのような様相」<sup>41</sup>を帯びる——は、テスによるアレック殺害という行為の意味が、このテキストの中で持つ重要性とは別に、ハーディのセンセーショナルリズムに対する偏愛を例証してくれるものである。往々にしてハーディは、このようなグロテスクな場面がテキストから浮き出してしまうにもかかわらず、そうした場面を挿入することが、彼にとって自明の小説作法の一つであるかのように、テキストの中に、ある間隔をおいて書き込んでしまうのである。

ハーディをセンセーション・ノヴェリストのグループから峻別し、リアリズム作家の方へ近づける最大の要因は、彼の自然描写にある。(登場人物の心象風景としての自然描写は、センセーション・ノヴェリストたちの作品には概ね欠けている)。<sup>42</sup>だがそうした自然描写の導入は、ハーディがセンセーション・ノヴェリストとしての資質を完全に捨て去り、そこから全く別の方向へ踏み出したということを意味するわけではない。例えば『帰郷』の第二章では、一人の老人の眼前に開かれた広大な荒野の風景が描き出される。その荒野を分かちように、「乾いた人気のない白い道」が、遙か彼方にまで延びている。その道の果てから一人の人物が現れる。老人はその男の方に近づくにつれ、彼の乗っている荷馬車が「毒々しい赤 (lurid red)」であり、男自身もまた、服、

帽子、長靴、顔、手にいたるまで、全身赤であることに気づく。目印のために羊を赤く染める代赭石商人 (redleman) であるその男は、「一時的にその色に染まっているのではなく、赤い色は彼の全身に染みついている (it permeated him)」のである。全身の赤、それも肌に染み込んでしまった赤が、ハーディ好みのセンセーショナルな描写であることは間違いない。(しかも彼の荷馬車の中には、結婚許可証の不備で式をあげることのできなかつたという、スキャンダラスな娘が潜んでいる)。しかしこの赤い男には、単にグロテスクな印象を醸し出す以上の重要な役割が課されている。

その老人は、何度も前方の景色を遠くの方まで見晴るかし、これから辿っていかねばならない景色の広がりを目を凝らした。ついに彼の眼は、遙か彼方で動いている一点、馬車のように思われるものをとらえたが、その点はどうやら老人が旅している方向と同じ方角へ向かっているらしかった。それはこの風景の中にある唯一のちっぽけな点のような人物であったが、その点に加わったことで、風景一帯にこれまで漠然と漂っていた寂しさが、強烈にいや増した。<sup>43</sup>

寂寞とした風景に人物が加わることによって悲しみが一層募る。この認識は、第一章のエグドン・ヒースの情景があまりにも前景化されすぎて見えにくくなってはいるけれども、おそらく『帰郷』というテキスト世界の彼方にほの見える原風景の根底を流れる認識である。

エグドン・ヒースがユーステイシアの心象の象徴であるとするならば、『テス』における風景描写——テスの移動に伴って変化する風景は、そのままテスの心理と一致する。しかし自らの悲しみを反映させながら風景の悲しみをとらえるのは、ユーステイシアの眼だけではなくて、登場人物から離れて全体を眺める視線が、『帰郷』というテキストには存在する。例えば前述の引用の場面では、風景に赤い男が加わる情景をとらえるのは老人の眼であるけれども、それによって寂しさがい

や増したと感じているのは、おそらくこの老人ではない。彼がこの場面で「見る」という役割を振り当てられているのは、この老人がユーステイシアの祖父であり、荷馬車の中に隠れている娘、トマシンの結婚が失敗に終わったことを、ユーステイシアに告げる必要があるというプロット上の問題から生じたことであって、彼の眼というレンズを通して風景を眺め、悲しみを感じるもう一つの眼、すなわちハーディ自身の眼差が、彼の背後には存在する。

同様に全体を鳥瞰的に眺める視線が、『テス』というテキストの中にも存在する。その眼は、自然の中で働く女性に対し、慈愛の眼差を注ぐことが多いようであるが、それは

彼女が戸外の自然の重要な一部となっているからで、普段のように、自然の中に置かれた単なる物ではないからである。[中略]野良の女は野良の一部であり、どういふわけか彼女自身の輪郭を失って、彼女を取り巻く自然の本質を吸収し、それと同化する(103)

からである。だからこの眼は、エンジェルがブラジルに立ったあと、職を求めて転々とするテスが、ついに「飢えた貧しい」(273)不毛のフrintクーム＝アッシュの農場で、メアリアンと共に苛酷な労働を堪え忍んでいるうら悲しい光景を見逃すことなく、「二人は、風景の中で自分たちが孤独な表情をたたえていることにも気づかず、自分たちの運命が正当か不当かなどと考えることもせずに、何時間も働き続けた」(274)というコメントを、さりげなく差しはさんだりもするのである。

『テス』というテキストに数多ある悲しみの情景の中で、エンディングのストーンヘンジの場面は、他と区別される異質な特徴を備えている。いかなる点においてか。それは、「何マイルも先の方から見晴らしのきく」(369)平野の右手から左手から、点のような男たちの姿が次々と現われて、テスを捕らえにやってくる光景を目にするのが、他でもないエンジェル・クレアだという点においてである。というのも、エンジェルはこのテキスト内で最も批判的に描かれている人物だからである。確かにハーディは、登場人物に対して常に一定の距離をおく。しかしテスはもちろんのこと、メアリアンやその眼を借りただけのユーステイシアの祖父、あるいはストーンヘンジの場面に現れる名もない男たちに対しても、強い共感や同情はないにせよ、批判的な眼差で眺めているわけでは決してない。風景の中に同

化して悲しみの一部となる者、あるいはそれを眺める者たちは皆、生の悲しみと無縁でない哀れなる者たちの仲間なのである。だがその視線がエンジェルをとらえるときには、批判的で、時に冷淡といってもよいほどの客観性を帯びてしまう。エンジェルを絶望のどん底に突き落とすテスの「告白」の場面は、その格好の例である。

テスはエンジェルが彼女への愛情を無理に押し殺しているのだということを知らずに、口を閉ざしたままだった。涙が、それがころがり落ちていく肌の毛穴を顕微鏡の対物レンズのごとく拡大してみせたほど大きな涙が一粒、彼の頬をつたってゆっくりと流れていったことにも、彼女はほとんど気づかなかった。(226)

茫然自失の状態、自分だけの悲しみの世界を作り上げてしまうエンジェルを眺める眼差は、冷酷である。「肌の毛穴」まで見通すような情け容赦ない視線は、自分の悲劇、あるいは悲劇と思ひ込んだものしか見えないエンジェルの愚かさ、客観的に正視する。このように批判の対象であったエンジェルが、エンディングの場面で一気に哀れなる者の仲間に戻されてしまうのは、どういふわけだろうか。さらにこの場面のあと、コーダのように付け加えられたテスの死刑の日の場面では、エンジェルはライザ＝ルーと並んで、丘の頂上から果てしなく広がる「美観」の中の「汚点」を「見る」者となり、二人を含む光景全体を一步ひいて眺める眼は、彼ら二人を「ジョットの描いた『二人の使徒』」(372)という一幅の絵のようにとらえてしまうのである。テスの死という洗礼を受けて、「誤って天使と名付けられた」(321)エンジェルは、悲しみの光景に加わる資格を得たのだろうか。またこれまでその存在が特に目をひくほどのものではなかったライザ＝ルーが、最後の悲劇の高まりの中で、主要人物として登場してしまうのはどういふわけだろうか。確かに彼女はテスの一番年長の妹として数回登場してはいるものの、ストーンヘンジの石の上に身を横たえたテスがエンジェルに向かって、「まるで世界中にあたしたち二人しかいないみたい。誰もいなければいいと思うわ——ライザ＝ルーは別だけれど」と言うとき、これまで二人の姉妹の愛情の交流が特に描かれていたわけではないだけに、テスの発言はかなり唐突なものとして響いてしまうのである。<sup>9)</sup>従って、ライザ＝ルーを力ずくで導入した理由は、テスが次の台詞

—「あの子があなたのものになってくれれば、あたし  
が死んでも、あたしたち二人の間は引き裂かれな  
いように思えるの」(369) —を口にするためであ  
ったと考えられるわけだが、だとすればこの台詞の意  
味を追求する必要があるだろう。テスのエンジェルに  
対する強烈な愛と、エンジェルの思い込みの激しい性  
格 — その限りでは純粋といってもかまわない — を考  
えると、二人の永遠の愛の契りとしてライザ＝ルーを介  
入させることには、どこか不自然さがつき纏うように思  
われるからである。以上のような問いに対する解答と  
なるような、このエンディングについての解釈を与え  
ることが、本稿の目指すところである。

## II

『テス』の冒頭部では、ゆっくりとした時の流れの中  
で、どこか鄙びた感じのする奇妙な時空間が現出して  
いる。<sup>6)</sup>テスの父親ジョン・ダービフィールドが家路に向  
かっている。その足取りは不安定で覚束なく、直線か  
ら心なしか左の方へとずれていくきらいがある。そこ  
へ通りがかったトリングム牧師は、ジョンの先祖を遡  
れば、高名なるサー・ペイガン・ダーバヴィルの血筋に  
繋がることを発見したと語る。ではそのダーバヴィル  
一族は今どこで暮らしているのかと問うジョンに、牧  
師はこう答えるのである。「お前さんの一族はどこにも  
生きとりはせん。消滅したんだよ (You are extinct)。[中  
略]虚偽の多い名家の記録では俗に男系消滅と言ってお  
るが、要するに落ちぶれて絶えてしまったということ  
だな。」

男系消滅という言葉の余韻を響かせながら、舞台は  
ブラックムーアの広大な風景へと移行する。その谷間  
から白い一団が現われる。数百年も前からマーロツト  
村で続いている祝祭行事、皮を剥いだ柳の小枝を手に  
隊列を組んで村を練り歩く「女性だけ」の集団である。  
しかしこの場面の移行と継続が、当然抱かせる予測を  
裏切って、彼女たちの集団には、絶滅してしまった男  
系に対比される「繁栄の喜びや勝利の色」はない。そ  
の身を覆う白いドレスは、あたかも経帷子のものであ  
り、亡霊のようにたゆたう実体のない一団と化してい  
る。

一行は皆、白の衣服をまもってはいたが、そこには  
一つたりとも同じ白はなかった。晒して純白に近い  
ものもあれば、青みがかったものもある。年配の女

性が身に着けているものの中には、(おそらく長年た  
たんでしまい込まれていたのだろう)死人のように青  
ざめた色のものや、古くさいジョージ朝のスタイル  
のものもあった。[中略]なかには中年あるいは初老  
といってもいいほどの女性も数名おり、歳月と様々  
な労苦に苛まれた、その針金のような銀髪と皺のよ  
った顔は、こうした華やかな場に置かれると、ほと  
んどグロテスクと言えるほど、哀れなまでに痛々し  
げな感じがした。(34-35)

二本足歩行がままならず、絶滅を宣言されてしまった  
ジョンが、突然現れた過去と退行的に結び付いてい  
るとすれば、年毎の祝祭を維持してきた老女たちもまた、  
歴史を支えてきた生命体の、いわば残滓のごとき存在  
にすぎないのである。

だがハーディは、すでに消滅してしまった世代、あ  
るいは下降線を辿りつつある世代だけに着目してい  
るのではない。むしろ彼の関心は、「一行の大半を占めて  
いる若い娘たち」(35)にある。彼は生命力に溢れた若い  
世代と、精神肉体両面において老いた世代の境界線を  
明確に引く。その際に両者を分かつ示差特徴となるの  
が、感情という点である。このダンスの場面では、初々  
しく白いドレスをまとった乙女たちの喜びは、それほ  
ど強烈ではない。「いまだ経験の色に染め上げられてお  
らず、単なる感情の器」(36)にすぎないテスも、そのう  
ちの一人である。じきに彼女の馭する馬のプリンスが  
事故に合い、テスは「顔からスカートにかけて、その  
真っ赤な血を浴びせかけられる」(51)ことになるし、さ  
らにアレックに犯される暗闇の森には、彼女自身の鮮  
血が不在のままに刻印されることになるのだけれども、  
この場面ではまだテスは激情を経験したことのない無  
垢な乙女である。しかし「恋の喜びも、失恋の痛みも  
知らずに、ダンスをダンスとして純粋に楽しんだ」(39)  
テスが、自分を踊りのパートナーとして選んでくれな  
かったエンジェルが立ち去っていく後ろ姿を、踊りの  
群れから「一人離れて生垣のそばで」(38)見送るとき、  
すでに彼女の感情教育は始まっていたといえるだろう。

占いや迷信を信じこみ、バラッドを歌いながら方言  
を話す母親と、学校教育を受けて、標準的知識を身に  
つけたテスとの間には、「200年もの年月の隔りがある」  
(43)とテキストは語るが、この美貌の母娘の差異は  
何よりも、そのものの感じ方にある。彼女の母親が、「労  
働を先送りにすることで、その苦痛から逃れようとい  
う策を本能的に」(41)講じ、酒場で夫の隣に座っている

何時間かの間は、単調な日々の労苦を「一切忘れる」(42) ことのできる、感情の弦の弛緩しきった女性であるのに対し、テスは女という性のために被らねばならなかった様々な不幸を通して、また「喜びの極致と苦痛の極致」(179) という両極の感情に引き裂かれるような体験を通して、感情の人となっていく。アレックに犯されたあと、トラントリッジへやって来た道を再び辿りながら生家へと戻っていくテスは、尾根の頂きに立って、故郷のマーロット村を一望する。「ここからの眺めはいつでも美しいが、今日のテスには恐ろしいほど美しく思われた」(92)。美は「ものそのものではなく、それが象徴するものにある」(283) と感じられるテスの眼に、谷間の風景が「恐ろしいほど美しく」映るのは、その谷間の底にある村では決して知ることのなかったことを体験してしまうことによって、故郷を「余所者」(104) の眼で眺めねばならなくなった現在の自分の「異質性」を、胸に痛く感じ取ったからに他ならない。

トールボットヘイズの農場で、その知性や思考、そして何よりも彼女の美貌のために、テスはエンジェルによって選別されたのであるが、そのエンジェルでさえ、テスの感情の深さを推し測ろうとはしない。彼と結婚の約束をかわしたあと、彼女の清らかさと正直な心を賛美するエンジェルの言葉に耐えかねて、テスが突然、何故過ぎし日の村のダンスで、自分をパートナーとして選んではくれなかったのかと叫んだときにも、エンジェルはテスのことを、「何というむら気な娘だ」(196) と思うだけであるし、またトールボットヘイズの農場で出会ったばかりの頃、テスが生に対する不安や恐怖を語ったときにも、エンジェルはこのようない介の乳搾りの娘がそのようなことを考えていたと知って一瞬驚くが、しかし「進歩的な思想と呼ばれているものは、実はその大部分が、男や女が何世紀にもわたってつかんできた感情を、最近の形で定義し直したものの、何々学とかイズムという言葉によって、より正確な表現にしたものにすぎないのだと思いついたとき」(135-6)、その驚きは薄れていくのである。

テスの感情の深さですら想像できないエンジェルにとって、農場の他の娘たちの気持ちなど理解の埒外にあることは当然であるだろう。だがエンジェルに恋いこがれる三人の娘たちは、その愛と絶望の深さにおいてはテスと同等である。この娘たちもまた、いずれは単調な労働と時の流れに感情が麻痺してしまうことになろうとも、トールボットヘイズの農場においては、ささいなことが喜びの種にも悲しみの種にもなる若い世

代に属しているのである。しかしテスとエンジェルの婚礼の日の彼女たちの異常な挙動は、生を深く心に感じることでできる若い世代の特質として、むしろ好意的にとらえられていた感情の激しい振幅の許容範囲を遥かに越えてしまう。<sup>7)</sup> 一番若いレティは身投げをはかって失敗し、メリアンは酔いつぶれて、やがては酒びりになり、イズはひたすら暗く沈みこむ。新婚の二人のために荷物を運んできたジョナサンの言葉を借りるならば、彼女たちは皆「気がふれてしまったかのよう」(219) である。それはまさに不快感をかきたてるようなグロテスクな場面となっている。

このグロテスクさこそが、テスと三人の娘たちを分かつ決定的な分岐点である。テスにみられる顕著な特徴の一つは、その生命力の強さである。確かにフリントクーム=アッシュでは、大柄なメリアンや、屈強な農家の娘たちの働きには遠く及ばず、苛酷な労働に耐える体力も十分にあるとはいえないが、「子供の頃、家で酒の害を目のあたりにしていた」(317) テスは、他の労働者たちと違ってアルコールの力も借りずに黙々と働く。もちろん彼女の悲惨な境遇が、テスを死への願望へと衝き動かすこともある。エンジェルからの送金も底をつき、職を求めてさまようテスの絶望感に追打をかけるように、ある日彼女の過去を知る男からなぶりものにされたテスは、一目散に林の中に逃げ込んで、落葉の下に身を潜める。

世の中にあたしほどもじめな者がいるかしら、とテスは自問した。そしてこれまでの無駄に費やされた人生を思い、「全て空なり」と呟いた。[中略]エンジェル・クレアの妻は、眉の下を手で押さえ、その曲線や、柔らかない皮膚の下に感じられる眼窩の縁に触れた。そうしながら、いつかこの骨が剥き出しになる日がくるのだろうかと思った。「その時が今ならいいのに」と彼女は呟いた。(267)

しかしそのすぐあとで、傷ついたキジたちの苦しみを長引かせないように絞め殺してやりながら、「あたしは身体に傷をおっているわけじゃあない。切り刻まれたわけでも、血を流しているわけでもない。食べたり着たりできる二本の手だってあるのに」と考えて、「昨夜鬱々とした気持ちにとらわれたことを恥ずかしく思う」(268) のである。再生能力がなく、絶望感に身を任せて、そこに安住してしまう娘たちとは違って、テスには立ち上がる気力がある。

アレックの子を宿したことは、テスに深い傷を残す。しかしその傷を汚点として忘れないのは世間の人々なのであって、彼女にはその傷を癒すだけの回復力が備わっている。逆に言えば、この強靱すぎる彼女の生命力こそが、テスに新たな悲しみをもたらす原因ともなっている。テスの傷は、まさにその悲しみに「ソロウ」と名づけて彼女の肉体から摘出し、切り離し、葬り去ることによって、癒されることができなものなのである。「もっとも卑しいものから高次なものまで、あらゆる生き物にあまねく浸透している、あのだこかで甘い快楽を見出そうとする、抗しがたい、普遍的な、自然とわき上がってくる傾向」(118)が、テスを生へと駆りたてずにはおかない。そして悲しみが深ければ深いほど、そのあとに目覚める生への願望は、より切なく、より苦いものとなるだろう。

テスは周囲の人々から何度も「世間知らず (simple)」と呼ばれるが、不義の子を宿したということで、テスがあれば耐えがたい責め苦を感じずにはいられない理由は、実はテスがそれほど「世間知らず」ではないことに起因している。

生垣の中で眠る鳥たちの間を歩いたり、月の光に照らされた養兎場で跳ねまわる兎たちを眺めたり、またキジの止まっている枝の下にたたずんだりしながら、彼女は自らを「無垢」の住み処に乱入した「罪」であるかのように考えていた。だがその間ずっと、彼女はどの区別もないところに区別を設けていただけなのである。テスは自分が周囲と対立関係にあると感じていたが、その実、完全に調和していたのだ。彼女は社会で受け入れられている掟の一つを破ることにはなったけれど、彼女が自分は大変な異分子だと考えている環境において知られている法を犯していたわけでは、決してなかった。(101)

テスが「自分の立場に対する世間の思惑」を気にするのは、「ある幻想」に、「因習的なものの見方」(106)にとらわれているせいだとテキストは語るが、彼女は自分に対する世間の目がどのようなものであるか想像できるほど、「世間」のことを知っていたし、テスの過去の過ちを「一時の災難」程度にしか感じない、呑気な母親とは違って、テスにはその事件を意識しすぎるだけの感受性と倫理感が備わっている。テスの被った不幸を、「若い頃に間違いを犯した女は大勢いる」(193)とやり過ごしてしまう母親の横着さはテスにはなく、「他

の人々には喜劇であることが、自分には悲劇である」(144、183)という事態を招いてしまった我が身の境遇に、ひどくみじめな思いをする。<sup>9)</sup>死を憧憬する絶望感が必ず生への渴望に阻まれることによって、それほどまでに強靱な生命力が、ますます悲しく呪わしく思われるように、過ってはいない自分を知りながら、罪人としての社会的烙印をことのほか気に病み、それでいて潔白な自己を主張したい気持ちにかられるテスは、この矛盾する感情を生きぬくことによって、新たな地点に到達する。過ちを犯した/犯された自分と、いまだ無垢なままの自分、別言すればエンジェルの眼にテスとして映っている自分と、映っていない自分を、共に相矛盾することのない自己として受け入れること、その結果、過去でも未来でもなく、現在だけを見つめること——「過ぎ去ってしまったことは考えないで!あたしは今のことしか考えないわ。それでいいじゃないの!明日何が起こるかなんて、わかりっこないんですもの」(365)——それは今ある自分の中の何物をも排除せず、あるがままの自分を受け入れることであり、ここにおいて彼女の感情教育は終着点を迎えるのである。

ありのままの自分を受け入れていくテスの心性は、彼女の神に対する態度にそのまま反映されている。毎日曜、かかさず教会へ通っていながら、エンジェルに宗派を問われてわからないと答える彼女にあるのは、素朴な信仰心であって、宗教に関する知識ではない。その信仰心は「宗教」という概念にとらわれていないだけに、ちょうどその心境の変化によって彼女の眼に映る自然が異なった様相を帯びるように、彼女の神への信仰も、その時々感情によって変化する。例えば、アレックに犯され重く沈んだ心で故郷のマーロット村へ帰っていく途中で、方々にペンキで聖句を書きつけている男に出会った彼女は、「汝、犯すことなかれ」と記された言葉を目にして、「神様がそんなことをおっしゃったなんて、あたし信じられないわ」(97)と呟く。かと思えば、トラントリッジの牧場へ向かう道中、辺りの風景の美しさに思わず幸福な気持ちになって、「でもひょっとしたら、あたし神様のことがまだ本当にわかってないのかもしれないわ」(118)とも思う。怒れる神と、万物の父なる慈悲深き神という異なる側面にとまどいながらも、彼女は理論ではなく、経験によって神を理解しようとしているのである。テスは神という存在を、その存在以上に大きいものとも、それ以下のものとも前提しない。変わるのは彼女の感情であって、それによって生じる様々に異なる神の像は、どれもみなテス

にとって「神」なのであり、それはまさに彼女にとって一義的に括りきれない、「わからない」存在なのである。

宗教の社会的、政治的背景についての知識が皆無のテスに対し、テス自身にも判然としない彼女の宗派を、「言葉の使い方においてはトラクト主義者の、本質的には汎神論」(176)であろうと見当をつけるエンジェルは、宗教に関する知識を得ることで、信仰を持たなくなった人物の典型である。二人の差異は、彼らの眼がとらえる視界の差となって現われる。テスの喜びや悲しみが、風景にくっきりと投影されているのは対照的に、エンジェルの眼のレンズは焦点が定まっていない。「いつまでもひとつ所を、放心したように」(126)見つめているエンジェルの眼は、「全体の印象を重んじて、外界の風景の個々の要素を見過ぎてしまいがち」(131)である。そのエンジェルが、聖職につくことをあきらめ、農業に進路を定めてトールボットヘイズの農場で暮らしていくうちに、

日一日と、この鋭い感覚を備えた滞在者は、その光景の新たな面を意識し始めるようになった。客観的な変化は何も起こっていなかったが、単調であったものが多様なものに見えてくるようになった。農場の親方やその家族、そこに雇われている男も女も、クレアが親しくなるにつれて、化学変化を起こしたように、それぞれが差異化され始めた。寛大なる神への信仰が衰えるとともに、文明人をとらえ始めた慢性的な憂鬱病から、彼は彼の置かれている状況を考えると、驚くほど自由になった。(130)

あの冒頭のダンスの場面で、娘たちを個として弁別することのできなかったエンジェルの眼は、ここでようやく全体を構成する要素を読み取る力を身につけたのだという了解へと、テキストは読者を誘導していくかに見える。そして彼は、アレックとの事件を経て、あのダンスの頃の「経験の乏しい娘とは別人」(92)のようになってトールボットヘイズに仕事を求めてやって来たテスの魅力的な唇を、柔らかな頬を、深い瞳を、驚きの混じった喜びと共に知覚していくのである。エンジェルにとってテスは自然の女神そのものである。<sup>9)</sup>

しかしここで彼が徐々にテスに心を奪われていく過程が、彼の眼の変化と一致していることは、単に19世紀小説に常套の恋愛と結婚というテーマ以上の重要な意味を持つものであると思われる。そう考える理由は、

エンジェルがトールボットヘイズの農場にやってきた経緯をテキストが語り始める際に、その書き出しが、他のセンテンスから浮き出して見えるような効果を持っていると感ぜられる点に求められる。

エンジェル・クレアが必ずしもくっきりとした一人の人物としてではなく、感謝の念にみちた声、いつまでもひとつ所を放心したように見つめている眼、そして男性にしてはいくらか小さすぎるし、輪郭も繊細すぎるけれど、時々思いがけず下唇を強く引き締めるので、そうすると優柔不断な感じも消えてしまう、よく動く口を持った人物として、過去から浮かび上がる。(126)

ここでテキストは、エンジェルの過去の歴史をその生年から過去形で語り始めるのではなく——彼に過去の身の上を打ち明けたいと言いつつ、ためらっているテスに、エンジェルは「君がそうしたいなら話してごらんよ。その大切な身の上(history)を。ほら、私は西暦何年に、どこそこで生まれましたという具合に…」(189)とうながす——、彼を過去から浮かび上がらせてしまう[Angel Clare rises out of the past](126)。それはあたかも、このテキストにとって重要な意味を持ちながら、これまで語られることなく深層部にしまいこまれていたものが、その重要性のために、やむなくテキストの表面に浮上してこざるをえないといった印象を与える。そしてそれはまさに、エンジェルにとって苦々しさとともに記憶されていた過去であり、抑圧という明確な意識はないまでも、彼が心の隅に追いやってしまいたいと感じている、それゆえ彼にとって重要な意味を持っている、彼の過去の歴史なのである。

エンジェルは、ケンブリッジに進んで、それぞれ教会と大学という、共に聖職者への道を歩んだ二人の兄たちとは違って、聖職につくことを拒否し、農業で身を立てることを決意するが、その理由を低教会派に属する厳格な福音主義者の父に次のように説明している。

「だめなんです、お父さん。僕は39ヵ条の中の第4条を(残りはともかくとしても)『宣言書』の要求するように、『文字どおり、文法どおりの意味』に受け取って署名に同意することはできません。だから今の状態では牧師になることはできないんです。」(128)

第4条とはすなわち「キリストの復活」について述べて

いる項である。エンジェルがぶつかったのは、聖書に書かれている「奇蹟」(miracles)の問題であり、この記述に懐疑を抱き、それを「文字通り、文法通りの意味」に受け取ることができない以上、39カ条に同意して国教会の聖職者になることが、彼にとって難事となるのは、自明のことである。それまで真実として信じていた聖書が、そうではない部分を内包していると気づいたとき、エンジェルは「親同様に愛し」、「その歴史」に対して何物にもまさる深い尊敬を覚えていた「教会」という「制度」(128)の「外観」に「欺かれていた」と感じてしまうのである。

この「欺かれていた」という感覚をエンジェルが抱くのは、教会に対してだけではない。テスの告白によって、これまで彼が信じていたテスとは異なるテスの姿が現われてきたとき、エンジェルは彼女に裏切られたと感じる。そして、「ひとたびその眼が外観によって欺かれていたとわかると、あまりにも率直すぎた心を、今度は執拗なまでに偏屈にねじ曲げてしまう反感の波に揺すぶられて」、エンジェルはテスに対してひたすら心を閉ざす。

総じて、彼は非常にやさしく愛情深い性質であったが、その奥底には、堅い論理の鉄床が、柔らかい壤土の中の鉄脈のように潜んでおり、そこを貫通しようとするあらゆるものの刃先をはね返した。それがかつて彼の中であって、教会を受け入れることを拒み、今またテスを受け入れることを拒んでいるのだ。 (236)

真実である部分とそうでない部分という、矛盾する二つの側面を見出して、宗教を拒絶したように、エンジェルはテスの中の対立する二つの真実に直面することによって彼女を拒絶する。<sup>109</sup>「僕が愛してきたのは君じゃない。君の姿をした別の女性だ」(225)という彼の台詞は、トールボットヘイズの農場で彼が身につけたかと思われた個別のものを見分ける能力が、実は彼が見たいと思っていた側面だけを見ていたにすぎなかったのだという事実を露呈する。まだ薄暗い真夏の夜明けに、「キリストの復活の時刻を思い」(140)ながら、テスと連れ立って牧場を歩くエンジェルは、彼女の顔が「燐光を発しているよう」で、「魂だけがゆらゆらと漂っているかのように、霊的な」彼女の姿を見つめる。「彼女が彼に最も深い印象を与えるのは、こうした時であった。彼女はもはや乳搾りの娘ではなく、幻想のよう

に思われる女性のエッセンス——女性全体が一つの典型的な形に凝縮された姿であった」(141)。神に祈ろうとしながら、その祈りを捧げている相手は実はエンジェルである。それほどまでにテスの彼への愛は「偶像崇拜」(212)にも近い性質のものであったが、同様に、聖書の内包する真実についての矛盾に苦しむエンジェルは、テスを何の矛盾も孕まない、自然という真実を体現する女神としてとらえることで、知らず知らずのうちに、彼が懐疑を抱いていた宗教に替わる新しい宗教を見出していたのである。<sup>110</sup>そしてテスの告白によって、その宗教もまた崩れ去ったとき、エンジェルはテスに欺かれたと思い、彼女を捨てる。

しかしテスの背信をなじるエンジェルの言葉が、何か変だと思われる、どこか論点がずれていると感じられてしまうのは、彼がテスの過ちを、彼女の家系と結びつけてしまうためである。

君の家の家系を発掘したあの牧師は、黙っていらればよかったんだ。僕は君の家の没落を、このもう一つの、君の意志の堅固でないということと結びつけずにはいられないんだ。落ちぶれた家というのは、意志の衰え、行動力の衰えということなんだから。まったく君はどうして僕に君の家系の話なんかして、僕に君を軽蔑させるような口実を与えたりしたんだ。僕としては君のことを、新しく生まれたばかりの自然の愛児だと思っていたのに、君ときたら退廃した貴族の、時季はずれの苗だなんていうんだからな。(228)

テスの父親が、ダーバヴィル一族の末裔であることを、トリングム牧師から聞かされる冒頭部の場面から始まって、このテキストの主題の一つが、家系ないしは一族の歴史にあることは間違いないだろう。しかし旧家というものに対するエンジェルのこだわりは、その理由が判然としていないだけに、異様に思われる。例えば、トールボットヘイズの農場で、エンジェルとの接触が始まって間もない頃、テスは自分の子供じみた言動が、エンジェルに愚かな娘という印象を与えたに違いないと思い、突然自分の血筋のことをエンジェルに語りたという欲望にかられる。(テスが家系のことを思い出すこのくだりも、いささか強引な印象を与える。)しかしエンジェルがこの件をどう受けとめるか不安に思ったテスは、事前に農場の親方にさぐりを入れる。(ここで何故テスが不安を感じなければいけないかとい

う理由も、釈然としない。)親方によれば、エンジェルは大の旧家嫌いである。この農場で働いているレティという娘も旧家の血をひいているが、

クレアさんがこの話を知りなされると、何日も何日も可哀相なあの子の娘に向かって、いかにも軽蔑したようにおっしゃったよ。「あーあ」とな。「君は決していい乳搾りにはなれないよ!君の技量は全部もう何世紀も前に、パレスチナの遠征で使い果たされてるんだから。さらに偉業を成し遂げるには、一千年ほど土地を休めて力を貯えなけりゃね!」(138)

と親方は大げさに語って聞かせる。またテスの家系のことを知る前に、たまたまダーバヴィル家のことを口にしたエンジェルは、父親に「お前が旧家に関心があるようなことを言うなんておかしいね」と言われたことに多少いら立ちながら、「政治的にはそれらが古いということの価値に疑いを持っています。[中略]でも抒情詩や劇といった観点からすれば、いや歴史的に見ても、僕は旧家にどこか心を惹かれるんです」(171)と答える。嫌悪するにせよ、心惹かれるにせよ、こうしたエンジェルの旧家に対する異常なこだわりは、テスとの結婚が具体化するにつれて、その愛すら「極端に浮世離れた」(239)ものであったエンジェルの、意外に俗物的な一面と結びつき始める。エンジェルは、「他人を犠牲にして権力をふるってきた少数の利己主義者」(190)として彼が嫌悪していたはずの貴族の血統が、彼の両親の眼にテスがよりよく映るための助けになるのではないかと喜ぶ。「ひょっとするとテスの血統は、世界中の誰よりも、彼自身にとって、より大きな価値を持つものであったかもしれない」(209)。

この種の俗物性は、「政治的には嫌悪するが、詩や劇や歴史の見地からは心惹かれる」というエンジェルの旧家に対する感情と、どう関わっているのだろうか。その解答は、エンジェルの過去の歴史についてテキストが語る例の場面に、さりげなく潜ませてある。エンジェルは聖職につくことを拒否して、父親と激しく言い争う。大学は「聖職につくための足掛かり」(128)であると考えている彼の父親は、息子たちをケンブリッジにやるために、日々の生活を大層切り詰めている。そしてエンジェルは、父親と口論の末、聖職につく意志のない自分にはその権利はないからと言って、ケンブリッジへの進学を止してしまうのである。

この決定的な論争の効果は、ほどなく現れた。彼はそれから何年もの間、漫然と勉強をしたり、働いたり、冥想にふけったりした。そして社会的な慣例や習慣に対して無関心であるといった態度を、かなりはっきり取り始めた。地位や富といった実利的な榮譽は、ますます軽蔑するようになった。「古き良き家柄」でさえも(これは故人となった、さる地元の名士が好んだ言い回しであるが)、その相続者にしっかりとした新しい決意があるのでなければ、何の魅力も感じられなかった。(129)

エンジェルの旧家嫌いの発端は、彼が聖職への道を放棄したことにある。エンジェルは古いことを嫌い、新しさを好む。農場の親方から、彼の旧家嫌いを聞かされたテスは、「自分が彼の眼に興味ある者として映ったのは、主にその伝統のない新しさ(untraditional newness)と見たもののせい」(139)ではないかと考える。つまりエンジェルの中で、古い伝統ある権威的な国教会は、特権的な貴族たちが権勢をふるっていた旧家のイメージと結びついているのである。だからこそ聖職の道をあきらめて、農場でテスを女神とする新しい自然の宗教に遭遇した(と思った)エンジェルは、彼女もまた彼を失望させた国教会と同じく矛盾を孕んだ存在であったと知らされたときに、彼女の過去をその古い家系と結びつけてテスを激しくなじるのである。それならば、結婚前に彼女の高貴な血筋を知ってエンジェルが喜んだという点は、どのように解釈すればよいのだろうか。この彼の変節ぶりは単に、「地上の愛のようではない」(193)愛でエンジェルを一心に想うテスの精神性に比べて、精神的と見えながら、現実的な利得も忘れないエンジェルの俗物性を際立たせるためだけのものであったのだろうか。この問いに答えるために、ここで議論を歴史の文脈に戻してみたい。

### III

1860年、雑誌『一年中』に『二都物語』のあとを受けて連載の運びとなったウィルキー・コリンズの『白衣の女』は、彼の良き指導者にして保護者、さらに一回りも違う年齢差にもかかわらず、彼の熱烈なる賛美者であり親友でもあった、当時の文壇の第一人者ディケンズをも凌ぐ爆発的ヒットとなる。「誰も彼もが口をきわめて褒めそやし、朝から晩まで『白衣の女』の噂でもちきり」。<sup>13</sup> 続く1862年に出版されたM. E. ブラッドン



の『オードリー奥方の秘密』に至っては、『白衣の女』にもまさる売れ行きで、その翌年には、『オードリー奥方』と並ぶ彼女の二大重婚小説『オーロラ・フロイド』の連載が、『テンプル・バー』誌上にて始まる。すなわち、離婚、重婚、不義姦通、殺人、放火、精神異常などを共通項として、およそ1860年より続く10年余りの間、一世を風靡する、そして若きハーディの執筆欲をかき立てることになる、俗にセンセーション・ノヴェルと呼ばれる大衆小説群の黄金時代の幕開けである。<sup>(43)</sup>

読み手の熱狂と批評家からの激しい糾弾が入り乱れる、この種のセンセーションリズムの賑々しさとはおよそ性格を異にするとされる分野で、この時期、やはり激しい論争を引き起こした一冊の画期的な書物が現れた。1859年出版の、ダーウィンの『種の起源』がそれである。<sup>(44)</sup> 確かに進化という考え方は、それまでも存在した。<sup>(45)</sup> しかしダーウィンの説が開陳される以前に支配的であったリチャード・オーウェンの説では、生物が時と環境の作用によって変形したという、ダーウィンの進化論に非常に近い考え方をとりながら、その起源に、ある原型を想定することで神の先験的な意図を強調しようとしたのに対し、<sup>(46)</sup> ダーウィンの説は、神を度外視して科学の面からのみ思考されたものであるという決定的な差異が存在した。<sup>(47)</sup> 科学と宗教をめぐる問題の起源が、正確にいつの時代に求められるのか定かではないが、この問題が一気に前面に押し出されてくる一つのきっかけを与えたのが、『種の起源』の出版であったことは間違いないだろう。しかしこの問題を考える際に気をつけなければならないのは、科学と宗教を単純な対立概念として措定することはできないという点である。ダーウィンは科学の立場をとる。オーウェンは宗教におもねりながら科学との両立を試みる。信仰と科学は分離させるべきであるという主張もある。『種の起源』が出版される以前に、すでにダーウィーンと同様の立場をとるT.H. ハックスリーの場合、進化論を支持しているが、完全な無神論者ではなく、「知り得ないことは語らない」<sup>(48)</sup> という立場をとる不可知論者である。さらに宗教のみに固執し、進化論を受け入れないグループ——その代表格がサミュエル・ウィルバフォースである——もあった。<sup>(49)</sup>

こうした論争をさらに激化させることになる重大な書、すなわち『批評論集』が、翌年の1860年に出版された。これは広教会に属する「6人の聖職者と1人の敬虔なる平信徒」<sup>(50)</sup> によって手がけられた論文集であり、「主としてオックスフォードの宣言書、*Tracts for the Times* の

新シリーズ、*Tracts for changed times*」<sup>(51)</sup> といった趣を持ち、その出版によって、「イギリス正教会は、怒り狂ってパニック状態に陥った」<sup>(52)</sup> というのも、執筆者はそれぞれ自分の専門、関心に従って、異なるテーマの論文を書いてはいるものの、彼らはみな科学では説明のつかないキリスト教、とりわけその奇蹟の問題に疑問を持ち、聖書批判に向かうという共通の姿勢を示していたからである。国教会のメンバーでありながら、自らが属する制度の信条に懐疑を抱く彼らが、聖書に書かれていることの真実性という問題にこだわったとしたら、彼らに対する非難の射撃は、制度の内側にいながら、その制度を裏切ったという不誠実さに向けて発射されることになる。ジョゼフ・L・アルソルツによると、ヴィクトリア朝においては、「客観的な真実」「事実」としてのtruthよりも、「ある人物が正直であるかどうか」というtruthfulnessの方に重点がおかれる、つまり「語り手の陳述が正確な事実であるかどうかということよりも、語り手の道徳性の方に、より関心が寄せられる」<sup>(53)</sup> 傾向にあったが、だとすると、『批評論集』をめぐる一連の論争の特徴は、まさにtruthを追求すればuntruthfulになるという、この奇妙なダブル・バインド的状况であったと言えるかもしれない。

『批評論集』の事件は、その執筆者7人の個人的な信仰の問題だけではなく、広教会というグループから発した彼らの宗教が、大枠としての国教会とどのような関係を結ぶことになるのかという、宗教の構造に関わる重大な意味を孕むものであった。宗派の問題がまとまった形で扱われたのは、1853年の『エジンバラ評論』に掲載された「教派」という論文においてであるが、そこでは広教会は、「味方からは穏健派、寛容派、広教会派と呼ばれ、敵方からは自由主義派、無差別論派と呼ばれている。その顕著な特徴は、包括的であろうとする姿勢である。そのスローガンは博愛と寛容である。[中略]この派が奉じる教義は、高教会、低教会と一致したものである。つまり神のキリストにおける顕現、キリストの贖罪、神の恩寵による帰依、信仰義認が、この派の信条の基本をなすものである」<sup>(54)</sup> と書かれている。これが少なくとも1853年の時点での広教会の特徴だとすると、『批評論集』の著者たちは、その基本的な信条において完全に別の方向へ踏みだしてしまっている。『批評論集』出版の直後に『ウェストミンスター評論』誌上でこの論文集を批判したフレデリック・ハリソンによれば、

これらの論文すべてに見られるのは、宗教とは次第に発達していくものであり、宗教の精神に備わった法則に従って信条も進化し、人間の思考は途切れなく連続しているといった考え方である。[中略]彼ら全員に対し一般論を言うならば、途切れのない発達という考え方は、どんな形のものであれ、神秘的な啓示という考えを排除するのみならず、ある完全な、もっといって超越した天の光が過去に見出されたとする仮説、ないしはある理想的な、または魅力的といってもよいある規範が、かつて人間によって達成された、もしくは考えられたことがあったという仮説の可能性をすべて排除してしまうのである。<sup>(25)</sup>

だがハリソンが批判するのは、彼ら著者たちが科学よりの立場をとり、進化論を受け入れることによって、宗教上の不可思議な事柄、奇蹟を否定したからではない。ハリソン自身、そもそも儀式性の強い高教会の影響の中で育ちながら、やがて科学に関心を抱くようになり、オーギュスト・コントとの出会いによって実証主義者となる。そして超自然を排除したところで人間の幸福を考えようとする人道教 (Religion of Humanity) を推進していくことになるのである。彼が『批評論集』を批判するのは、彼らが奇蹟を否定し、従来のキリスト教の虚偽と彼らが考えるものを暴き出しながらも、なおかつ自分たちはキリスト教徒としてとどまっているという点なのである。

中間の道などない。著者たちは「イギリスのプロテスタントイズムが基礎としている一般原理」にあくまでも従うか(これこそがハリソンの定義する「キリスト教」である)、さもなくばその原理の枠の外に出て、実証主義者になるべきである。[中略]彼らは自らをキリスト教徒と呼ぶべきではない。なぜならキリスト教徒とは定義上、聖書の教えを文字通り信じる原理主義者のことをいうからである。<sup>(26)</sup>

興味深いのは、それぞれ異なる宗教上の立場に立つ人々が、『批評論集』の批判に関しては同一線上に並ぶことになるという点である。例えば実証主義とは全く相容れない高教会派のベンジャミン・ディズレイリは、1864年に行った演説の中で『批評論集』を批判する際に、ハリソンと同様の見解を示しているのである。

私が理解に苦しむのは、彼らがこうした結論に辿り

ついた以上、そして銘々の見解を持ち、良心の命ずるところに従った結果、彼らが聖書の教義を斥け、39ヶ条を否定しなければならないという結論に辿りついたからには、彼らはその信念を有したまま、正統なキリスト教徒としてとどまらざるべきではないはずであります。彼らは聖書の教義を斥け、39ヶ条を否定したにもかかわらず、依然として教会の支持者であり、国教会の高位聖職者、さらには教区牧師や副牧師の熱烈なる支持者であると誓ってみせていることなのです。<sup>(27)</sup>

ディズレイリが中心人物の一人であった「ヤング・イングランド」と呼ばれる政治団体が、オックスフォード運動の影響を強く受け、ウォルター・スコットの小説に見られるような中世の封建主義や貴族主義へのノスタルジアを抱き、信条的にはローマ・カトリックときわめて近いものを持っていたとするならば、同じ高教会派でも、サミュエル・ウィルバフォースは、広教会グループから起こったリベラリズム<sup>(28)</sup>の動きを危険なものとして排除するために、非常に厳格なプロテスタントイズムを唱えたという意味で、保守派の代表格であった。ダーウィンの進化論を批判し、ハックスリーと対決して見事に敗北したウィルバフォースは、『批評論集』に対しても激しい敵意をみせて攻撃をしかける。1861年1月の『季刊評論』に掲載された「批評論集」という論考の中で、「個々の論文の持つ調子は同じものであり、この論文集全体に浸透している。神聖このうえないテーマを慎みのないやり方で扱う、好き勝手なことを言う、従来キリスト教の本質だと考えられていたものを全て捨て去って、あとに残った影のようなものを気儘に擁護するといった態度が、至るところにみられる」<sup>(29)</sup>と、痛烈に弾劾している。

四方からの攻撃のなかで、当然『批評論集』を弁護するような評論もあった。つまり、ウィルバフォースによる批判が出た直後、1861年4月に『エジンバラ評論』に掲載の運びとなった、A.P. スタンリーの手による書評がそれである。『批評論集』所収の論文のうち最後の論の著者、ベンジャミン・ジョウイットの生涯の友人であったスタンリーは、『批評論集』の論者たちは不幸にも誤解されているとして、弁護を試みる。

彼らは奇蹟を否定しているのではなく、純粋に奇蹟でしかありえないものを、その内容とは無関係に、自然の法則に悖るものであるとか、神の啓示であると

いった具合に受け取ってしまう、旧式かつ理不尽なやり方に対して、科学や歴史の側から批判が起ることにより、事態がますます困難になっていくということを痛感していたというのが本当のところなのである。<sup>(60)</sup>

だがこの A.P. スタンリーの弁護にもかかわらず、『批評論集』の中でもっともその論がラディカルであったとして、ロウランド・ウィリアムズとヘンリー・ブリストウ・ウィルソンの二人は、聖職者としての資格を剥脱され、教会の裁判にかけられる。その一方で、この論文集が出版されてから 12 年後に、著者の一人フレデリック・テンブルはカンタベリーの主教となり、またあれほど物議をかましたダーウィンはウェストミンスター寺院に埋葬されるという、現在の地点から回顧すれば、思想の変動の、実にめまぐるしい時代であった。<sup>(61)</sup>

そしてその中で新しい言葉も生み出されていった。従来信じられていた聖書の教義を真実ではないとして、広教会の内部から批判する『批評論集』の著者たちが奉じる宗教がそれで、「新キリスト教」という名称が与えられた。「新キリスト教」に関係するのは『批評論集』の著者だけではない。同じく広教会派に属したマシュー・アーノルドもその一人で、彼の「文学とドグマ」という論文に対する批判は、「新キリスト教とマシュー・アーノルド氏」というタイトルで 1884 年に『同時代評論』に掲載されたが、そこでも非難の論拠は『批評論集』に与えられたものと同様である。

単に宗教というだけでは、彼 [アーノルド] は満足しない。ある特殊な宗教、現代化されたキリスト教でなければならないのである。それだけではなく、またその宗教は古いキリスト教で用いられたものと同じ神聖なる書物に基づき、主にそれに依拠するようなキリスト教であるべきなのだ。またそれに加えて、まさにこの神聖なる書物の誤りに気づいたことが主な原因となってキリスト教の信仰から離れるようになったという人々にとりわけ受け入れられるようなキリスト教であるべきなのだ。<sup>(62)</sup>

『批評論集』の著者たちが従来のキリスト教を批判した理由の一つが、奇蹟の問題にあることはすでに見た。アーノルドも奇蹟の問題に関しては、「文学とドグマ」の中で「我々が思うに、奇蹟に対する異議は、強調せずとも、攻撃せずとも、論争せずとも、現在その力を發揮

しているし、これからもますます發揮し続けるだろう。キリスト教が奇蹟とともに滅びるべきものでないとするれば、キリスト教を是認する根拠は奇蹟以外のところに見出されなければならない」と述べている。

だが彼らがキリスト教、正確に言えば聖書に懐疑を抱くようになった理由はもう一つある。それは聖書における言葉の解釈に関わる問題である。ハックスリーはダーウィンの進化論が発表された以後でさえ、進化論とは関係なく、福音書に書かれていることは本当に文字通りにとらえてよいのかという不信を抱いたし、<sup>(63)</sup> アーノルドもハックスリーと同様の疑問を持っていた。<sup>(64)</sup>

おそらくイエスの言葉であるとされているものうち、何かの場合に彼が実際に言ったこと、あるいは言ったことの多くを含まないものはほとんどないだろう。しかし言葉の関連や接続が、しばしば失われていることは明白である。事柄が、あるべき真の場所や順序から、はずれているのである。どんな報告者でも、記憶の喪失によって、しばしばこうした事態が起きるだろう。イエスの報告者の場合には時に、理解力の不足によって、こうした事態が起きただろう。彼らを取り巻く伝説が、知らず知らずのうちに彼らをおある方向に偏らせ、奇蹟を好むことが彼らを偏らせ、その終末論的観念が彼らを偏らせる。これら 3 つがイエスの言葉の上に牽引力を及ぼして、それらを必ずしも正確でない場合や場所や順序の中に引き入れるのである。<sup>(65)</sup>

ここでは聖書の中のある記述、とりわけ奇蹟に関する記述が、科学的な事実との照合により、その真実性が疑われるというのではなく、科学とは関係なしに、聖書というテキストの読解が問題となっている。この問題が起きるのは、聖書がイエス・キリストの手で書かれたものではなく、イエスが語ったとされる言葉と聖書との間には、使徒という伝達者が介在しているためである。アーノルドが問題にしているのは、伝達者と伝達された言葉の関係であり、主として伝達者が持つ先入見のために歪められてしまった言葉という観点からとらえられている（「ある方向に偏らせる」という表現は、『教養と無秩序』のなかの「アナーキー」の概念を想起させる）。

『批評論集』の論者のうち、この聖書の言葉の問題を正面から論じているのはベンジャミン・ジョウイットである。彼は「聖書の解釈について」という論文の冒頭

で、聖書の解釈が複数あるという事実に着目している。

聖書の解釈をめぐる、非常に異なる見解が存在するという事は、周知の事実であるとはいうものの、奇妙なことである。キリスト教徒なら誰でも、旧約聖書と新訳聖書を、神聖なる書物と見做しているが、それらの書物が持つ意味に関して、彼らの意見が一致しているわけではない。聖書自体は最初から変わっていないのだが、聖書の注釈者の方が、世の中や教会の組織に起こった変化の影響を、やや蒙っているかのように見える。一人ひとり、あるいは団体としてのキリスト教徒がそれぞれ異なる見解を持っており、注釈者の解釈は、それに合致するように強いられたり、限定されたりするのである。聖書の中の同じ言葉が、プロテスタントにはある認識を、カトリック教徒には別の認識を抱かせてしまう、またドイツ人が解釈すると、ある意味になるものが、イギリス人の解釈では別の意味になってしまうといったことは、当然であり、また必然でもあるだろう。<sup>407</sup>

この言葉のずれの問題、ド・マン流に言えば「読むことのアレゴリー」という問題にこだわった人物を、もう一人あげておきたい。アーノルドの姪のメアリー・オーガスタ・ウォード、通称ミセス・ハンフリー・ウォードである。雑誌『19世紀』に掲載された「新改革」という彼女の論文は、<sup>408</sup>副題に「ダイアローグ」とあるとおり、ロナルツとメリマンという2人の男性の対話という形をとっている。2人はオックスフォードの同窓生であり、聖職についているロナルツをメリマンが訪れるところから話は始まる。メリマンは、聖職につくことをやめて法曹界に入ることを決意したと言って、ロナルツを驚かせる。理由を問うロナルツにメリマンは、これまで真実として信じてきた神学関係の資料が、ドイツ語のものと英訳されたものでは異なっているという事実を発見してしまったためだと答える。

だがその結果、私は私が持っていた真実の概念が、すっかりひび割れ、壊れ去ってしまったことに気づいただけだった。つまりこういうことなんだ。真実が2つあるのだ。物についての真実と、精神についての真実だけではなくて、歴史についての真実が2つあり、原典研究についての真実が2つあるのだ。<sup>409</sup>

このウォードの「新改革」という論文は、ちょうどハ

ックスリーの「不可知論」をめぐる一連の長大な論争とともに『19世紀』に掲載される。そこでハックスリーは、イエス・キリストの言動について次のように述べている。

さてイエスが実際に何を言い、何を行ったかという問題は、断固として科学的な問題であり、それは歴史と原典研究による方法でしか解決できない。それはあまりにも困難な問題であり、前世紀を通じてヨーロッパで最高の頭脳を持ち主がかかわり続けてきた問題である。<sup>410</sup>

つまりここでは歴史と原典の研究は、文学の問題でも宗教の問題でもなく、科学の範疇に組み込まれている。これまで見てきたような宗派の分裂——従来のキリスト教、それとは異なる思想の下に成立する実証主義や不可知論、そしてその狭間で揺れ動く「新キリスト教」——を引き起こした聖書の言葉の問題は、あくまで真実を追求する「科学」という側面を抜きにして語ることはできない。科学と宗教は、それぞれ互いの存在を支える他者として、分離不能な関係を取り結んでいるのである。<sup>411</sup>

それぞれに異なる宗教的立場を主張する人々が、皆一様に「真実」という問題に拘泥しながら、なおかつそこに相容れない複数の真実を生じさせてしまうイデオロギーとは、それでは一体どのようなものであったのか。1830年代からとりわけ顕在化されるようになった一連の宗教論争の持つ一つのイデオロギーの結集を、我々は1877年から1878年にかけて『19世紀』誌上で大々的におこなわれた「モダン・シンポジウム」の中に見出すことができるように思われる。<sup>412</sup>

このシンポジウムのテーマは3つに分けられる。第一は「宗教心の衰えが道徳に及ぼす影響」をめぐる。第二はフレデリック・ハリソンによる「魂と来世」というタイトルの論文をめぐる。第三は「政治に対する大衆の判断は、上流階級の判断よりも公正であるか」というものである。一つのテーマについて、様々な立場、宗派の人々が約10名程度、論文を寄稿している。今とりわけ着目したいのは、第一のテーマである。そこでは明らかに不可知論者のハックスリーと実証主義者のフレデリック・ハリソンの二人は、宗教の道徳に対する優位性を認めないという点で一致している。<sup>413</sup>ハックスリーの方は、さらに宗教と道徳は切り離すことが可能であり、道徳はそれだけで自立できると考えている。ハ

リソンは両者の共存が必要だと考えているが、しかし彼の考える宗教とは、いわゆるキリスト教ではない。それ以外の人々、すなわち正教 (orthodoxy) の擁護者たちは、宗教と道徳が互いに及ぼし合う影響の程度については個々人で差があるものの、少なくともこの二つを切り離すことは不可能だと考えている。従って、科学重視の流れの中で宗教が力を失っていくことは、とりもなおさず道徳の墮落につながることになる。道徳は宗教の存在を支える力であると同時に、宗教を宗教以上のものにして、人を拘束する手段に変えるイデオロギーでもある。道徳の欠如は、墮地獄の恐怖と結びつく。猿への退化よりも天使への上昇を願う人々にとって、道徳とはこの世で彼らがはずすことのできない重い石臼となる。

では神学を必要としない立場をとる者にとって、来世とはどのようにとらえられるものなのか。フレデリック・ハリソンの「魂と来世」という論文の眼目を、ハックスリーは実に簡潔に要約してみせている。

ハリソン氏による魂と来世についての印象的な言説は、アイルランドの蛇についての有名なエッセイと、ある類似性を持つ。というのも、氏の論文が意図しているのは、言葉のごく普通の意味においては、魂や来世などというものは無いということを示すことにあるからだ。魂とは三位一体の基礎として一般によく知られているが、その基礎として魂がおこなっていた個人的な活動は、死とともに、後世の人々へとその任務が受け継がれ、来世は代理人によって永遠不滅のものとなることになる。<sup>(44)</sup>

「生命体の魂を、道徳や精神ではなく、肉体の面からのみ説明しようとする物質主義 (materialism)」を徹底的に批判して、「知性と道徳が組み合わさった、まさに『宗教』の根源である spiritual life」<sup>(45)</sup>を強調するハリソンにとって、実証主義には「spiritual life や、道徳的な責任、墓の向こうにある世界、そこでの希望や義務の存在する余地が十分にある」<sup>(46)</sup>。肉体が朽ちてのちも、この世に対する義務をいまだ持ち続けることによって、決してなくなりたくないその精神には、来世での希望がある。この発想に対する論議の行方を追求することは、本稿の目的ではない。「新キリスト教」から「来世」の問題へと、時代の思想の流れを辿ってきたところで、再度、『テス』というテキストへ、あのエンディングの死の場面へと立ち返ってみたいと思う。<sup>(47)</sup>

#### IV

『テス』のエンディングをめぐる解釈が困難であるのは、このテキストにおける主人公テスの位置づけが定かでない、つまり彼女に課されている役割が明確でないことに依っている。この点に関してテキストは意識的に読者の判断を曖昧にさせようとしている節がある。「好古家トリングム牧師」(29)の働きによってテスの一家の血統が判明しても、真面目に働く気概もなく、この朗報も酒興の口実の一つにして浮かれ騒ぐだけのお目出度いテスの父親には、かつての騎士たちの荒々しくも高貴なる血の痕跡は見られない。むしろアレックの住む屋敷へ、当然のごとく使者として送られるテスこそが、ダーバヴィルの血統の正統なる末裔であると、テキストは一見語っているように見える。加えてテスの高潔さを強調するのは、彼女の異質性である。彼女は母親に幾度か「変わった娘」と評されるような特性を備えている。そしてトールボットヘイズの農場で、エンジェルがテスの存在に気づく場面でも、テスは農場の親方から奇妙な娘と思われるような発言をしていた。

「あたし、幽霊のことはわからないけれど」と、彼女は話していた。「でも生きている間にあたしたちの魂が身体のとそに出ていくことだってあると思うの。」「何だって、本当かい。そうかねえ」と、親方は言った。「魂が出ていくのを感じる一番簡単な方法は、夜に草の上に寝転んで、大きな明るい星を見上げるんです。そしてじっと精神を集中していると、すぐに身体から何百マイルも何百マイルも離れていることに気がついて、身体なんていらぬような感じになるんです。」(132)

他の人々から奇妙だと思われるこうした発言や、「自分が長い列の中の一人にすぎないことを知ったところで、何の役に立つんでしょうか」という「農家の娘」(137)らしからぬ歴史観は、彼女の知性と感受性とを際立たせる。その結果、「迷信がどの土地よりも長くすたれずにいる」(326) ブラックムーアの谷間で、日々の生活にどっぷりとつかりながらも、うんざりするほど楽観的な彼女の両親との血縁関係よりも、遠い昔に栄華を極めた気高い血筋との類縁関係の方が、より自然なものとして納得されてしまうのである。

と同時にこのテキストは、それとは逆ベクトルを持つ挿話を随所に忍ばせる。例えば、彼女の美貌が母親譲りだということ。父親の家系にも、異教の要素が紛れ込んでいること(彼の祖先は、サー・ベイガン・ダーバヴィルである)。さらにトールボットヘイズの農場のおかみさんが、エンジェルとテスが結婚するつもりであることを聞かされたとき、「テスがトールボットヘイズに到着したあの午後、農場を横切って歩いてくる様子がひどく上等に見えたのだ、テスが名家の出だということが、あの時誓って断言できるほど自分にはよく判っていた」などと言ったあとで、テキストは、

実のところ、クリックのおかみさんは、こちらに近づいてくるテスの姿が、優雅で美しいと思ったことははっきり覚えていたが、上等に見えたというのは、あとで知った情報に助けられて、想像力が生み出したものであったかもしれない(202)

と醒めた口調でつけ加える。実際テスはアレックとの事件のあと、「自分の新しい生活にむけての夢や行動の中に、ダーバヴィルという空中楼阁を持ち込むことは、今後決してあってはならないと固く決意した」(113)のであり、トールボットヘイズの農場で、またもこのダーバヴィルの名前が彼女を悩ませることになったのは、彼女自身のこだわりによるというよりも、むしろエンジェルの旧家に対する激しいこだわりのせいであると考えられるのである。ダーバヴィルの血筋の発見から一連の不幸が始まったテスが、この家系とは無縁のところできいていこうとするのはもちろんのこと、牧師から注ぎこまれた知識によって有頂天になったかに見えるテスの父親ですら、その家名へのこだわりは、存外あっさりした現実的なものである。故郷を離れ、アレックの住む屋敷へと重い心で出立していくテスに向けて、父親は酔いの中から次のように言う。

テス、あいつに言っとくれ。おちぶれて、昔の威光もなくなったんなら、わしが称号を売ってやろうとな。そうだ、売ってやるぞ。べらぼうな値をふっかけるわけじゃねえ。[中略]百ポンドで売ってやると言ってくれ。いや、細かいことにはこだわらねえぞ。50でいいと言え。いや、20だ。そう20ポンドだ。これ以上はまけられねえ。いいか、一族の名誉は一族の名誉だ。それ以上は1ペニーたりとも、まけられねえ。(66)

テスを「容赦ない無情な」(366)世界へと押し出したのが、先祖に対して不実な、この御都合主義であったとすれば、彼女の悲劇をとことんまで押し進めたのは、それと同じくらい身勝手なエンジェルの忠義心である。結婚式の当日、エンジェルの父親からテスにあてて、宝石類が一式送られてくる。その宝石は、エンジェルの名付け親であった地主の夫人が、エンジェルの花嫁に送るようにと形見に残したものである。こんな豪華な宝石はあたしに似合わないから、売ってしまった方がいいんじゃないかしら、と言うテスに、エンジェルは「売ってしまうだって。絶対だめだよ。信義に反することになるじゃないか(It would be a breach of faith)」(218)と答えるのである。現実離れたエンジェルは、「生活」よりも「信義」に重きを置く。そして彼はブラジルに立つ前に、

例のブリリアントカットの宝石は、その権利がテスのものであるのは、(彼が遺言の意味を正しく理解していたとすれば)彼女の存命中に限られていたので、安全のために銀行に預けてはどうかとテスに勧めた。そして彼女は躊躇なくこれに同意した(247)

ののだが、その結果この「信義」の象徴である宝石は、テスが困窮の底にあるときも、彼女にとって何の手助けにもなってはくれない。それはまさに、テスの一家にとってダーバヴィル一族という肩書が、一文の得にもならないのと同様である。すでに見たように、エンジェルが彼の信じていた宗教から裏切られたと感じて、国教会から離れようとしたことと、テスに裏切られたと思って彼女を捨てたことがパラレルになっており、よって彼がテスの裏切りの原因であるとする旧家の血統と、国教会とが同一視されるとするならば、にもかかわらずエンジェルが「信義」に執着し、テスの血統を喜んだことは、彼の中にいまだ国教会へのこだわりと、それを完全に切り捨ててしまうことのできない愛着が残存していることを意味するのではないだろうか。エンジェルをとらえる冷淡な眼差しは、国教会を批判しながら、なおかつその制度の枠から抜け出せずにいる彼の「新キリスト教」的な立場を非難しているのではないだろうか。

この非難の眼差しが向けられるのは、広教会といった一部のグループだけではない。最初は無神論者のようでありながら、突然狂信的なメソジストへと、「改心したというよりも変身」し、しかしテスとの再会によっ

てあけなくその熱狂を捨ててしまうアレックの存在を忘れるわけにはいかない。その他大勢にすぎない農家の親方や労働者に至るまで、個々の人物が比較的丁寧に描き出されているこのテキストの中で、アレックの造形は、彼が主要人物の一人であることを考えるならば、些か不十分な感があることは否めない。アレックが「悪党」というレッテルを貼られるのは、あの暗闇の森の場面、そこで何が起こったか書き記されていないあの空白の場面に、読者が「レイブ」という言葉を当て嵌めるときであって、それを抜きにすれば、彼の悪党ぶりを証明するものはそれほどないといってよい。それ故テスが、群衆の前で説教をしているアレックに久方ぶりで再会する場面での彼の描写――

女たらしだと思わせた唇の形は、今や嘆願を表わすものとなり、昨日は放埒さど解釈された頬の輝きも、今日は言葉巧みな敬虔さの輝きへと高まり、獣性は狂信に、異教主義はパウロ主義へと変わっていた。かつて彼女の身体をぶしつけにぎょろぎょろと眺めまわした眼は、獐猛といえるほどの荒々しい神学への熱情で輝いている。自分の望みが邪魔されたときに、いつも彼の顔に浮かんだ陰険なとげとげしさが、今では、再び汚辱の中でのたうつ状態へ戻ろう戻ろうとする背教者の風貌を描き出す役割を果たしていた(292)

――は、「レイピスト」という彼の符丁を思い出すことによって、とりあえず納得されるものの、最初に登場したときのアレックは、実はこのような描写に見合うほどの悪党ぶりを示していたわけではない。<sup>(49)</sup>従って、このアレックの容貌に対する猛烈な嫌悪感は、彼が一瞬転じたメソジストの狂信ぶりへの非難の反映ではないかと推測されるのである。<sup>(49)</sup>このような宗教への揶揄に貫かれたテキストの中で、テスはどのように位置づけられているのだろうか。彼女の任務とは、テキストが一見誘導しているように、消滅してしまったダーバヴィル一族という起源に向けて、「連続体の中のある欠如、一族の系譜における空白のページ」<sup>(50)</sup>を埋めることであったのだろうか。

『テス』というテキストは、まさに「予兆とその達成」<sup>(49)</sup>を繰り返しながら成立する。テスが気のすずまめままにアレックの屋敷へ出向かねばなくなる直接の原因は、彼女が飲んだくれた父親に代わって蜜蜂の巣を市へ運ぶ途中で、過って馬のプリンスを死なせてしま

ったことにある。この馬のプリンスが、ダーバヴィル家の高貴なる血統の象徴であったことは間違いない。<sup>(50)</sup>プリンスの死に際して、普段は酒に溺れてろくな働きもみせないテスの父親が、その死骸をほんの端金で売り払うことを断固として拒否し、これまでにない熱意で墓穴を掘る。その埋葬の場面で、

子供たちは新たに泣きだした。しかしテスだけは別だった。彼女の顔は、自分こそが殺人者であると思っているかのように、涙すら流さず、ただ青ざめていた。(53)

この「殺人者テス」のイメージは、ダーバヴィル家の馬車の伝説を何度か介在させながら、アレック殺害へと受け継がれていく。アレックを刺し殺してきたと語るテスとの逃避行を続けながらも、エンジェルは彼女の話が「本当」なのか「一時の幻覚」なのか確信が持てない。そして、もし真実であるとすれば、「ダーバヴィル家の血に潜んでいるどのような傾向が、このような異常な行為(aberration)――もしそれを異常と呼んでよいのならだが――に駆りたてたのかと訝しく思」(362)うのである。だがテスによる殺人という行為を、なぜ精神異常と結びつけなければならないのか。<sup>(51)</sup>なぜ文字通り、テスを殺人者とみなしてはいけなのだろうか。プリンスを殺すことから始まったテスの「巡礼」(119)は、その旅路の途中で幾度かダーバヴィル家のかつての所領を訪れ、その死を確認しながら、ついにはダーバヴィルの名を騙るアレックに至るまで、この忌まわしい名に関与する者全てを、その歴史からの呪縛を、断ち切っていく行程ではなかったのか。フロントクーム＝アッシュで働くテスのもとへ、ある日母親の病の報せが届き、テスは、彼女の振幅の激しい人生航路の拠点として、去っては戻り、離れては必ず引き戻された故郷のマーロット村へ、これを最後に訪れる。やがて「家の輪郭が見分けられる」ところまでくると、

それは昔のままにテスの想像力を呼びさました。それはいつまでも彼女の肉体と生命の一部であるかのようにだった。屋根窓の勾配も、切妻の材木も、煙突のてっぺんに途切れ途切れに並んだ煉瓦も、これら全てに彼女の個性と一脈通じる何かがあった。彼女の眼には、それらの一つひとつが、茫然と無感覚の状態にあるように映った。それは彼女の母の病を意味していた。(327)

この生家が彼女の生命と肉体から切り離すことのできない故郷であるのは、それがダーバヴィルの血をひく父の家だからではなく、母の家だからである。やがて父親の死により一家そろってこの地からの立退きを命じられたとき、テスは新たな故郷を求めてストーンヘンジへと辿り着く。「昔あたしの母は、この辺りで羊飼いをしていたの。それによくあなたはトールボットヘイズであたしのことを異教の民だとおっしゃっていたわね。だから今あたしは故郷に帰ってきたのよ」(369)。

だが土着(aborigine)の地、マーロット村から出発し、ストーンヘンジという起源(origin)にテスを辿りつかせることになった殺人という事実を、事実として直視できないエンジェルは、彼女の旅を、起源からの逸脱(ab-origine)としてしかとらえることができない。そのエンジェルが、ストーンヘンジの場面で、初めてテスの真実に直面することを強られる。遠くの方から点々と現れる男たちが皆、目的をもってこちらの方へ近づいてくることがわかったとき、突如としてエンジェルは悟る、「彼女の話は本当だったのだ」と。このとき彼は、殺人を犯したテスが、今ここに横たわっているテスと同一人物であることを知る。それはテスの中の殺人者としての部分とそうでない部分が、エンジェルの中で矛盾なく融合したということの意味するのではない。なぜなら、この男たちが現れる直前に、死後の世界についてテスが問いかけた、その質問に対するエンジェルの返答は、彼がいまだキリスト教の枠から抜け出していないことを明示するものだからである。

「ねえエンジェル、教えて。あたしたち死んでからまた会えるのかしら。それが知りたいの。」

彼はこんな場合であるから、返答を避けて彼女に接吻した。

「おおエンジェル、会えないってことなのね」と彼女はすすり泣きを押し殺しながら言った。「あなたにもう一度会いたいと、本当に本当に会いたいと思ってたの。どうして、エンジェル、あなたとあたしはこんなにもお互いに愛し合っているのに。」

このように重大なときの、このように重大な問いには、彼よりもずっと偉大なる方がそうであったように、彼も答えなかった。そして彼らは再びおし黙った。

テスの死の瀬戸際にいたってまなお、「彼よりもずっと偉大なる方」に忠実であろうとするエンジェルは、だ

から、「殺人者テス」を連行しにやってくる男たちの姿を目にしたとき、ただテスの中の一部、殺人者としての部分を、幻覚でも虚偽でもなく、紛れもない事実として認めただけなのである。だがその認識こそが、エンジェルに真の悲しみを与えて、彼を風景の中へと昇華させたのである。

エンディングのテスの死刑の場面では、もはやこの世のものではなくなった、不在としてのテスの存在が至るところにあって、その一つではない真実の姿は、いまだ迷いの晴れないエンジェルの頭上に暗く重くのしかかっている。だがそこに、テスの声を聞き取ることを忘れてはならないだろう。死の間際、「あたしたち死んでからまた会えるのかしら」(370)とエンジェルに問いかけ、啜り泣いていたテスが、彼女を連れにきた男たちと歩み去ろうとする瞬間、「エンジェル、あたし嬉しいといってもいいぐらい。ええ、本当に嬉しいわ!」(371)と言ったあの声を。その重苦しさに耐えかねたようにエンジェルが頭をたれるこの暗澹たるエンディングに、それでも一条の光がかすかに差しこむのを見たような錯覚にとらわれてしまうのは何故だろうか。それこそが、このエンディングの場面に、是が非でもライザ=ルーを導入する必要があった所以ではないのだろうか。エンジェルの傍らでやはり頭をたれている可憐な少女の澄んだ瞳に、この光と同様の煌めきを生じさせること、それがハーディの意図するところであったのだと解釈することはできないだろうか。<sup>64)</sup>だからこそ、ハーディの描くテスは、エンジェルのことを、天使を、神を信じる以上に信じ、彼こそが「彼女を純粋に愛し、彼女を純粋だと信じてくれた、地上でただ一人の男」(362-3)だと、読者を不安にするほどに強固な確信を抱いて死んでいくことができたのではないか。満足の言葉を残してこの世を去っていったテスが、もし来世に希望をつなぎ、ライザ=ルーにおいてその義務を全うしようとしているのなら、ダーバヴィル一族の死を弔う彼女の巡礼の旅は、また同時に、エンジェルの語る言葉を一語一句そらじみたテスが、ついには彼の到達しえなかった宗教観に辿り着くまでの、未来への旅路であったのかもしれない。<sup>65)</sup>



## 註

- (1) コリンズが絶頂期にあった1860年代を引き継ぐ形で、ハーディの処女作『窮余の策』は1871年に出版される。
- (2) Thomas Hardy, *Tess of the D'Urbervilles: A Pure Woman* (London: Macmillan, 1985), p.359. 以下この作品からの引用は全てこの版に拠るものとし、本文中に頁数を記す。
- (3) 登場人物の心境と風景との対応は、コリンズにおいては稀にみられるが(例えば『アーマデル』や『ムーンストーン』など)、それはハーディよりもむしろゴシック作家との類似性を感じさせるものである。
- (4) Thomas Hardy, *The Return of the Native* (Oxford, New York: Oxford UP, 1992), p.7. この作品からの引用はこの版に拠り、本文中に頁数を記す。
- (5) これより少し前に、母の病気を報せるためライザ＝ルーがテスを訪れてくるが、このとき初めて、彼女はテスの弟妹の中で特権化されるのであり、それはエンディングの場面で再びライザ＝ルーを登場させるための伏線であると考えられる。
- (6) 『テス』の冒頭部に着目した論文のうち興味深いものとしては、空白としての歴史という観点からとらえた Jan B. Gordon, "Origins, History, and the Reconstitution of Family: Tess' Journey," *ELH* Vol.43 (1976) と、地層のイメージでとらえた Bruce Johnson, "The Perfection of Species, and Hardy's Tess" in *Nature and the Victorian Imagination*, U.C.Knoepflmacher and G.B.Tennyson eds.(Berkeley, Los Angeles and London: U of California Press, 1977).
- (7) 『テス』を優生学の見地から読むとすれば、この娘たちのコントロールのきかない激情は、退化の兆候として読み取ることができるだろう。
- (8) テスが告白を行ったあと、エンジェルは彼女に向かって、「これは悲劇というよりも、嘲笑される類のものなんだ。君にはこの災難の性質がちっともわかっていない。世間の人々が知ったら十中八九まで冗談の種にするだろう」(229) と言うが、この台詞は、テスにはないエンジェルの俗物性を際立たせるものである。
- (9) 「エンジェルはテスについて数々の幻想を作り上げ、その最たるものが、彼女は彼女の属する自然の申し子というよりも、むしろ彼の考える自然の申し子であるという考えである。」Bruce Johnson, "The Perfection of Species' and Hardy's Tess," p.265.
- (10) 自らも過去に過ちを犯しながら、テスの過ちを許そうとしないエンジェルを、ダブル・スタンダードという見地から批判することは当然必要であるけれど、彼の拒絶の対象となったのはテスと宗教であり、テスの問題だけに着目するのは片手落ちであるだろう。
- (11) Bruce Johnson, *op. cit.*, p.268 参照。
- (12) Kenneth Robinson, *Wilkie Collins: A Biography* (London: Macmillan, 1974), p. 131.
- (13) センセーション・ノヴェルについての総括的な研究書としては、Winifred Hughes, *The Maniac in the Cellar: Sensation Novels of the 1860s* (Princeton: Princeton UP, 1890) 参照。
- (14) 『種の起源』に対する賛否両論の詳細については、ここではふれない。
- (15) Cyril Bibby, "Huxley and the Reception of the 'Origin,'" *Victorian Studies* (Sept. 1959), p.76.
- (16) William Irvine, *Apes, Angels, & Victorians: The Story of Darwin, Huxley, and Evolution* (1955; Lanham, N.Y., London: University Press of America, 1983) 参照。
- (17) 「ダーウィンの著作は始祖や真の始まりを探すためのものではない。それはむしろ変化していく過程を記述したものであり、そうした過程は、常にある一つの方向にむかうわけではない。」Gillian Beer, *Darwin's Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction* (1983; London: ARK Paperbacks, 1985), p.64.
- (18) 「それ (agnostic) は、教会の歴史の中で『グノーシス派』 (gnostic) と呼ばれている人々、すなわち私がまったく知り得ないまさにそうした事柄について、多くの知識があると公言してはばからない人々に対するアンチテーゼとして、私の頭に浮かんだ。」T.H.Huxley, "Agnosticism," *Nineteenth Century* (February 1889), p.183.
- (19) 1860年にオックスフォードで開催されたイギリス科学振興協会の席におけるウィルバフォースとT.H. ハックスリーの有名な対決については、Irvine, *op.cit.*, pp. 5-6. 参照。
- (20) Basil Willey, *More Nineteenth Century Studies*

- (London: Chatto & Windus, 1956), p.137.
- (21) *Ibid.*, p.139.
- (22) *Ibid.*, p.137.
- (23) Josef L. Altholz, "The Warfare of Conscience with Theology," in *The Mind and Art of Victorian England*, Josef L. Altholz ed. (Minneapolis: U of Minneapolis, 1976), p.62.
- (24) W.J.Conybeare, "Church Parties," *Edinburgh Review* (Oct. 1853), p.330.
- (25) Frederic Harrison, "Neo-Christianity," *Westminster Review* (Oct. 1860), p.309.
- (26) Basil Willey, *op. cit.*, p.165.
- (27) Benjamin Disraeli, *Selected Speeches of the Late Right Honourable the Earl of Beaconsfield* Vol.II, T.E.Kebble ed., (London: Longmans, Green, 1882), p.606.
- (28) キーブルやニューマンは「リベラリズム」と彼らが呼ぶ人々を攻撃したが、彼らがその言葉によって意味していたのは、「客観的眞実に鑑みした場合、その宗教の信条が主張することがどういものであるかということにはおかまもなく、誰もが自分の傾向と気性にもっともよく合う宗教的信条に従うべきだとする考え方」である。A.O.J.Cockshut, *Anglican Attitudes: A Study of Victorian Religious Controversies* (London: Collins, 1959), p.13.
- (29) Samuel Wilberforce, "Essays and Reviews," *Quarterly Review* Vol.109 (Jan. 1861), p.251.
- (30) A.P.Stanley, "Essays and Reviews," *Edinburgh Review* (April 1861), p.486.
- (31) Robert M. Young, *Darwin's Metaphor: Nature's Place in Victorian Culture* (Cambridge: Cambridge U.P., 1985), p.22.
- (32) H.D.Traill, "Neo-Christianity and Mr. Matthew Arnold," *Contemporary Review* Vol.45 (1884), p.569.
- (33) Matthew Arnold, *Dissent and Dogma*, R.H.Super ed. (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1968), p.270.
- (34) R.H.Super, "Humanity at Bay," in *Nature and the Victorian Imagination*, pp.235-236.
- (35) アーノルドとハックスリーは、科学と文学をめぐる論争において対立することになるが、これに関しては別の機会に詳述したい。
- (36) Matthew Arnold, *Dissent and Dogma*, p.270.
- (37) Benjamin Jowett, "On the Interpretation of Scripture," in *Essays and Reviews* (London: John W. Parker & Son, 1860), p.330.
- (38) この論文は、先の総理大臣グラッドストーンが、ウォードの小説『ロバート・エルズミア』について書いた書評の中で提出していた問題点に答えるために執筆されたものである。
- (39) Mary A. Ward, "The New Reformation: A Dialogue," *Nineteenth Century* (March 1889), p.459.
- (40) T.H.Huxley, "Agnosticism," *Nineteenth Century* (Feb. 1889), pp.170-171.
- (41) 科学と宗教の関係を歴史的に考察した研究としては、John Hedley Brooke, *Science and Religion: Some Historical Perspectives* (Cambridge: Cambridge UP, 1991) 参照。
- (42) "A Modern 'Symposium'," *Nineteenth Century* (April 1877), pp. 331-358; (May 1877), pp. 531-546; (June 1877), pp. 623-842; (Sept. 1877), pp. 329-354; (Oct. 1877), pp. 497-536; (July 1878), pp. 174-192; (May 1878), pp. 797-822.
- (43) だが不可知論と実証主義とは明らかに異なる立場をとるもので、ハリソンは「不可知論の未来」*Fortnightly Review* (Jan. 1889)の中で、「不可知論は宗教の進化の過程で、完全に否定的な一段階にある」と非難し、それに対してハックスリーは "Agnosticism," *Nineteenth Century* (Feb. 1889)において、ハリソンに反論している。
- (44) "A Modern 'Symposium,'" (Sept. 1877), p.334.
- (45) Frederic Harrison, "The Soul and Future Life," *Nineteenth Century* (June 1877), p.628.
- (46) *Ibid.*, p.632.
- (47) 『テス』の読解を、当時の宗教的な背景と関連させながらおこなっている論文としては、David J de Laura, "The Ache of Modernism" in Hardy's Later Novels," *ELH* Vol.34 (1967)がある。
- (48) 「ハーディによるテスの造形からすると、あの獵場の森で起こった出来事に対して、レイプという語を当てはめるのは強すぎる。[中略]換言すれば、テスは単にアレックの肉欲の犠牲者でもなければ、自然には、皮肉で運命的な因果関係の法則が備わっているという、ハーディの見解の犠牲になったわけでもない。確かに彼女の母親の忠告はよからぬものであったし、森の場面では、テスは肉体的に疲れはてていたけれど

も、彼女の女性という性と、それによって起こる事態に対して、最終的に責任があるのは、テス自身である。」 Elliot B. Gose, Jr., "Psychic Evolution: Darwinism and Initiation in *Tess of the d'Urbervilles*," *Nineteenth Century Fiction* Vol. 18 (1963), p. 265.

- (49) 律儀にして厳格な宗教心を持つエンジェルの両親に対する批判も行われている。とりわけエンジェルの結婚に関する母親の問いかけ——「その娘さんは立派な家庭のお嬢さんなの?」と、それに対するエンジェルの答え——「おそらくお母さんが繁栄してほしいと願っていらっしゃる種族、属、種の人ですよ」(169) は、彼らの俗物性を強調している箇所である。
- (50) Jan B. Gordon, *op. cit.*, p.366.
- (51) Charlotte Thompson, "Language and the Shape of Reality in *Tess of the D'Urbervilles*," *ELH* Vol.50 (1983), p.730.
- (52) Elliot B. Gose, Jr., *op. cit.*, p. 264.
- (53) 『テス』を優生学とのからみから論じたものとしては、William Greenslade, *Degeneration, Culture and the Novel 1880-1940* (Cambridge: Cambridge UP, 1994) 参照。とりわけテスがキジを絞め殺す場面をダーウィニズムの観点から論じているものとしては、Johnson, pp.276 - 277; Peter R. Morton, "Neo-Darwinism Fate in *Tess of the D'Urbervilles*," in *Tess of the D'Urbervilles* (N.Y., London: W.W.Norton, 1991), p.444.; Elliot B. Gose, Jr., pp.269-271. を参照。
- (54) とはいえ、このテキストのエンディングに再生としての明るい光を全面的に見出す Lewis B. Horne の意見には賛同しかねる。"The Darkening Sun of *Tess Durbeyfield*," *Texas Studies in Literature and Language* Vol.13 (Spring 1971).
- (55) 実証主義をめぐるハーディとフレデリック・ハリソンの関係については、Martin Seymour-Smith, *Hardy* (London: Bloomsbury, 1994), pp.318 - 319 参照。